

# 全国草原再生ネットワーク

草原がつなぐ人・自然・文化

ニューズレター

vol. 16

(Oct., 2013)

<発行> 全国草原再生ネットワーク  
<http://www.sogen-net.jp/>



長崎県五島列島の宇久島の野方草原 灯台と海と草原のコントラストが美しい  
(写真提供：横田潤一郎氏・弘子氏)

## ■各地からの報告

### 千葉「そうふけっぱら」の保全にむけた取り組みの近況ご報告 (高川晋一：(公財) 日本自然保護協会)

千葉県印西市のニュータウン開発予定地に、「奇跡の原っぱ」とも呼ばれる約 50ha の貴重な草原が残っています。開発事業が約 40 年間で中断していたため市街化を免れ、その一方で草刈り管理が継続されたことで、奇跡的に都市近郊に残された草原です。草原だけでなく森林や湿地・池などがセットで残されており、ホンドギツネや絶滅危惧種の動植物を初めとする 830 種以上の生物が確認され、各学会からもその重要性が指摘されています。

しかしニュータウン事業の終息を今年度末に控え、大規模な造成工事が今年から急ピッチで進んでおり、これまでに約 20ha ほどが更地となりました。これまで私たち日本自然保護協会と地元団体「亀成川を愛する会」は、要望書の提出や一般向けのシンポジウム・視察ツアーの開催、署名運動の展開など、この場所の保全にむけた取り組みを進めてきました。全国草原再生ネットワークのメンバーである多くの専門家の方々にも現地視察に同行いただき、また要望書に添える評価コメントの作成にも多大なご協力をいただきました。

このようなご協力がきっかけとなり、日本生態学会や日本植物分類学会からも要望書が出され、新聞・テレビ各社の報道につながるなど全国的な関心



がこれまでになく高まりました。その結果、各地から署名 10,408 筆が寄せられ、この 9 月 25 日に千葉県に提出しました。この活動を通じて事業者である千葉県企業庁・UR 都市機構からは「年度内は造成工事は行わない」「新たな造成は買い手がついてから」といったコメントが示されるなど、当初恐れていた即時全面造成はなんとか回避されることになりました。多くの方のご協力、心よりお礼申し上げます。

今後は次年度以降の事業の実施予定や要望事項への回答を文章で求めるなど、引き続き事業者と粘り強く話し合いを続けます。また、この場所が「奇跡」と呼ばれる理由やその価値、新たなニュータウンのあり方を改めて考えるシンポジウムを、別記のとおり開催します。高橋佳孝様にも基調講演を頂きますので、会員の皆様も是非ご参加ください。



ニュータウンでの大規模な造成工事



集まった署名を千葉県に提出

#### シンポジウム『奇跡の原っぱ「そうふけっぱら」を次世代へ』

- ・ 2013 年 11 月 24 日 (日) 13:00~17:00 東京大学弥生講堂一条ホール
- ・ 講演予定者：高橋佳孝 (全国草原再生ネットワーク代表)、西廣淳 (東邦大学准教授) ほか
- ・ 事前申し込み不要。定員 300 名。参加費 1000 円 (※全額を当活動に使用)
- ・ 問い合わせ：日本自然保護協会 高川晋一 (takagawa@nacsj.or.jp)
- ・ プログラム詳細は当協会ウェブサイトをご覧ください。



祝“三瓶山”国立公園指定 50 周年！

(森山俊信：島根県大田市市民生活部環境衛生課)

島根県の中央部、大田市にある“三瓶山”は、昭和 38 年 4 月 10 日に大山隠岐国立公園の一部に指定され、今年、50 周年という節目を迎えました。そこで、大田市をはじめ、島根県などの官民の関係団体による記念事業実行委員会を設立し、「自然環境の保護・継承」「地域振興」「観光振興」をテーマに、様々なイベントや事業などを展開しています。

先般 9 月 29 日には、「私たちの三瓶山、思い出、今、そしてこれから」をテーマに、約 700 人の来場者を向かえ、記念式典を開催しました。長年、三瓶山の環境保全活動等をされてこられた団体への感謝状贈呈や活動発表、なつかしの映像上映や写真展、また、登山家野口健氏の講演会などを賑やかに行いました。その前日にはプレイベントとして、昭和 36 年制作三瓶ロケ作品「赤い荒野」の映画上映を行ったところ、年配の方を中心に多数の来場があり、大盛況でした。

この様なイベント的な事業を行う一方、三瓶山周辺に在住されるお年寄りの方の話を書き留めた、聞き書き本の出版も予定しています。これらのお話からは、三瓶山周辺が観光地としてにぎわった頃の話とともに、放牧などを通じ人々の生活“営み”に、三瓶山が強く関わっていたことをうかがい知ることができます。(この出版事業は NPO 法人緑と水の連絡会議に委託しております。また、全国草原再生ネットワーク様には寄稿をお願いさせていただいています。)

これらの事業を通じ、強く感じたことは、三瓶山は本当に多くの方に愛されており、市民にとっての“原風景”であるということです。近年大田市では、世界



なつかしの写真 自然保護審議会委員国立公園候補地視察（西の原） 昭和 34 年 7 月

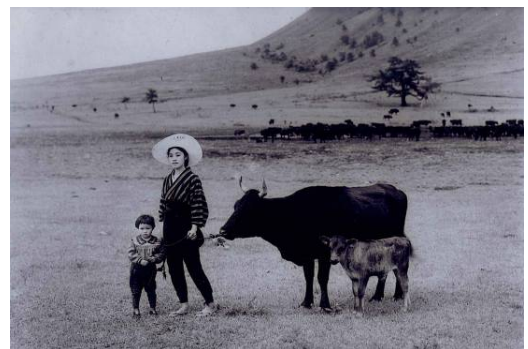
遺産となった石見銀山遺跡が脚光を浴びているところですが、一方で、大田市民にとっての三瓶山の存在の大きさを、改めて認識させられました。

そして、その原風景を構成する大きな要素が、国立公園に指定された理由でもある、「山麓の草原景観」であることは間違いありません。指定当時から、その面積は大きく減少しましたが、景観としての美しさや希少な動植物の生息地として、価値が見直されています。

今回の 50 周年記念事業は、これまでを振り返りながら、三瓶山のこれからの考える契機とするものです。地元住民、環境団体、行政が連携し、これまで以上の取り組みを続けながら、今よりももっと美しくなった三瓶山のもとで、“三瓶山”国立公園指定 100 周年が迎えられることを願っています。



記念式典では、北の原に伝わる伝説をもとにした創作神楽「姫逃池」を上演



なつかしの写真 西の原 時期不詳



【“三瓶山”国立公園指定 50 周年記念事業ロゴ】

今も昔も三瓶山を代表する風景である、浮布池から見た三瓶山をもとに図案化しました。

浮布池に映る逆さ三瓶、三瓶を象徴する草原の色、三つの瓶という名にちなみ、男三瓶、女三瓶、子三瓶のほほえましい三つの山の姿を表しています。

**阿蘇の草原が「草原特区」指定されました！**

(阿蘇草原再生協議会・募金事務局)

**危機に瀕する「阿蘇草原の維持・再生」に、地元のふくらむ期待！**

**～「保安林伐採規制の緩和」や「草原観光ビジネス」の起業も～**

9月13日、阿蘇地域の8市町村（山都町を含む）が申請した「千年の草原の継承と創造的活用総合特区」（草原特区）を、総合特区に指定することが決まりました。26日には、佐藤義興阿蘇市長が総務省を訪れ、政府の第4次総合特区に指定された「千年の草原の継承と創造的活用総合特区」（草原特区）の指定書を、新藤義孝大臣から受け取りました。

今後、約2万ヘクタールの草原を維持する仕組みづくりのほか、草原を生かした新たな観光スタイル構築を目指し、森林法や旅行業法などの規制緩和を進めます。

特区自体なじみが少ない制度ですので、以下に特区になるまでの歩み、特区に認められた内容などを解説します。

**■総合特区＝地域活性化総合特区制度とは？（内閣府資料より）**

- ・2010年内閣府が国の新成長戦略を実現するための政策課題の突破口として設けた制度。
- ・地域の包括的・戦略的なチャレンジをオーダーメイドで総合的（規制・制度の特例、税制・財政・金融措置）に支援するもの。
- ・実現可能性の高い区域に国と地域の政策資源を集中させ、地域資源を最大限活用した地域活性化の取り組みにより、地域力の向上を図る。

・阿蘇草原再生協議会観光利用小委員会で特区申請案を協議し同幹事に報告。

・H25年4月末に市町村連名（阿蘇市、南小国町、小国町、産山村、高森町、南阿蘇村、西原村、山都町）で特区申請書「千年の草原の継承と創造的活用総合特区」を国に提出。

・H25年9月13日内閣総理大臣指定（次項にその概要紹介）



**■「阿蘇地域8市町村」が共同で申請**

- ・阿蘇草原再生協議会（高橋佳孝会長、235個人・団体構成員）は「地域協議会」に。
- ・地域の責任ある関与と運営母体が明確であることが申請条件
- ・阿蘇地域の草原に関連する組織の一元化が望まれる観点から、阿蘇草原再生協議会が地域協議会として位置付けられました。

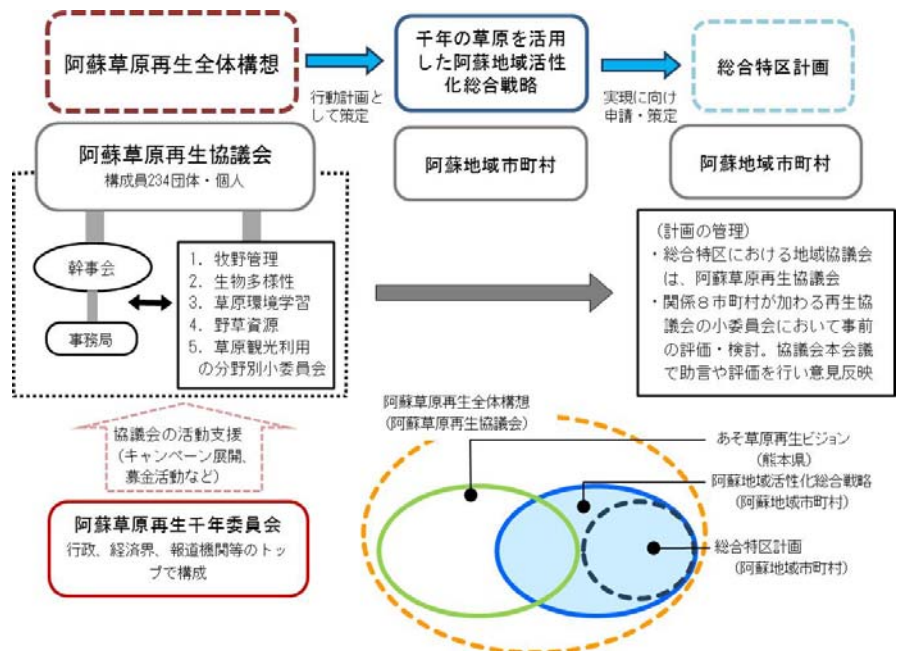
**■指定決定内容**

**(1)総合特区により実現を図る目標**

世界的遺産であり、地域にとって誇りである「阿蘇草原」を守り次世代に伝えていくとともに、草原の新たな活用と草原とつながる観光スタイルの創造

**■申請から指定まで**

- ・H23年度第一次申請は不採択
- ・H24年6月から(公財)阿蘇地域振興デザインセンター（以下阿蘇DCに略す）で再申請に向けて検討開始。
- ・草原保全に関する施策等を市町村に収集開始。地域住民や観光事業者へのアンケート調査、「あそ草原再生ビジョン」（県が策定）との関係整理。特区申請概要(素案)作成。





と資金還流の仕組み作りによる地域の活性化、ひいては観光立国の推進に貢献することを目指す。

**(2)国と地方で共有する包括的、戦略的な政策課題**

- ①草原（自然環境）の維持・活用
- ②観光消費や食料生産基盤の確保

**(3)目標達成のために実施する事項**

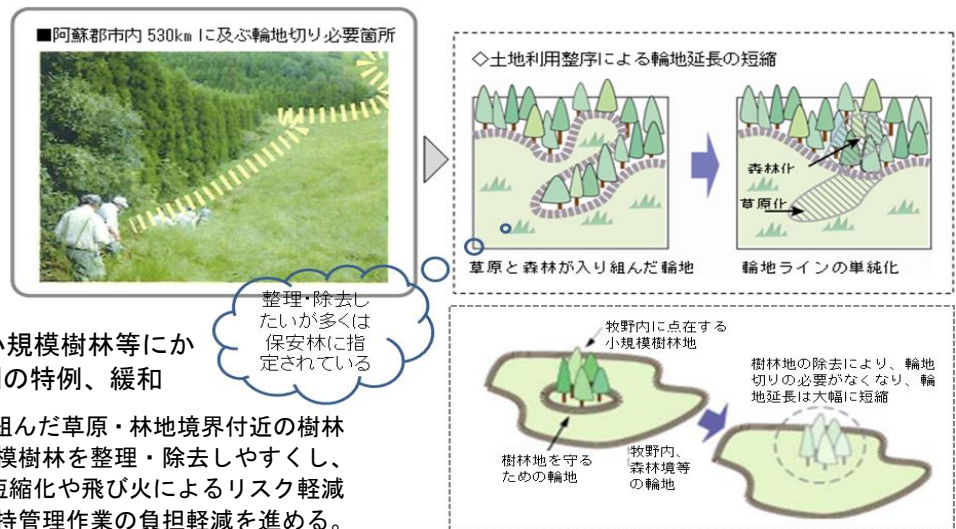
- 1) 解決策
  - ①草原（自然環境）の維持・活用
    - ア) 草原維持管理作業効率化
      - ・支援ボランティア派遣の拡大、土地利用形状の整理、恒久防火帯整備などの手法導入
    - イ) 草原維持管理費用の調達
      - ・公共財としての草原PR。多様な受益者などが資金提供して継続的な維持管理の財源づくり
  - ②観光消費や食料生産基盤の確保
    - ア) 草原由来製品の販売拡大
      - ・草原ブランド化と高付加価値化と販売拡大
    - イ) 草原案内システム構築化
      - ・草原と関わるためのハード・ソフトの基盤整備と各種新サービス提供によって、地域の自然や文化とのふれあいを緊密にする観光スタイルの創出
    - ウ) 草原利活用連携促進
      - ・従来タテ割りの草原維持管理や草原活用の取り組みを統合し、草原利用希望者や関連事業参加希望者などに対して、必要な調整と各種サービスが可能となる体制づくり。
- 2) 新たな規制の特例措置等に係る件は、申請者から提案により、国と地方の協議を踏まえ、関係府省が必要な措置を講ずる。

**■今後、期待されるコト**

- (1) ①ア) により、野焼きの支障となりやすい小規模樹林等にかかる保安林の伐採には森林法許可が必要であったが、規制の特例や緩和措置が講じられると、作業負担の軽減効果と安全面の確保と向上が相当高まることが期待されます。（地元の期待大）
- (2) ②イ) により、生物多様性の宝庫と言われる区域の一般公開を実現するために、ソフト・ハード整備を行なうことが可能となります。これまで希少動植物の保護策は非公開によって、エスカレートする盗掘問題にも対抗してきたが、観光資源として公開によって保護を行なう新たな領域に踏み込むことも注目されます。
- (3) H22年11月阿蘇草原再生募金の取組みスタート → 阿蘇草原再生千年委員会の存在と応援 → 熊本県が積極的に草原再生施策へ転換する「草原再生かばしまイニシアティブ」表明 → 「阿蘇千年の草原を活用した地域活性化総合戦略」策定 → 「阿蘇地域の世界農業遺産」認定 → そして今回の「総合特区」指定につながりました。

さらに、今夏阿蘇地域のもうひとつの朗報「世界ジオパーク国内候補地推薦決定」によって、今回の「総合特区」指定が来夏「世界ジオパーク」につながる大きな後押しとしても大変期待されるところで、いずれも阿蘇草原の価値評価の高まりとその利活用による地域活性化を促進できる環境の大きな変化（前進）を示していると考えられます。

- (4) 一方、草原維持管理の担い手不足の状況はさらに深刻さが進行している中、今後上述のそれぞれの取組みや動きが良い連携と好連鎖をしていくように、どのようにできるかが試される、まさに重要な局面に至っていることは間違いないようです。



**野焼きに支障が生じる小規模樹林等にかかる保安林について規制の特例、緩和**

野焼きに支障のある、入り組んだ草原・林地境界付近の樹林や、草原内に点在する小規模樹林を整理・除去しやすくし、輪地切り（防火帯）延長の短縮化や飛び火によるリスク軽減を図ることにより、草原維持管理作業の負担軽減を進める。

## 阿蘇地域の牧野カルテ作成のための植生調査に参加しました (2013 年度版) (横川昌史：京都府在住)

2013 年 9 月 23～24 日に、熊本県の阿蘇地域で行われた牧野カルテ作成のための植生調査に参加しました。阿蘇地域では牧野組合という組織がいくつもあり、それぞれが野焼きや放牧、草刈りを行っています。こういった地元牧野組合の維持管理活動を支援するため、環境省が主体となって現在牧野カルテの作成を進めているところです。牧野カルテでは牧野の土地利用履歴や、動植物の生息・生育状況、牧野内の地理・地名などの調査を行っています。

2013 年度は 3 つの牧野で調査が行われています。今回はそのうち 2 つの牧野の植生調査に参加しました (写真 1)。A 牧野は阿蘇の北外輪山に位置し、放牧地や採草地、牧草地といった様々な土地利用で牧野が維持されており、高さの異なる多様な植生が広がっています。B 牧野は阿蘇の中央火口丘に位置し、全域にわたって放牧が行われています。今回は 2 つの牧野を調査して興味深かった植生について報告します。



写真 1 植生調査の様子。1m×1m の枠を置いて、枠内に出てくる植物の名前や被度（ある植物が枠の中を被っている割合）を測ります。



写真 2 阿蘇の北外輪山にある A 牧野の隔年採草地。2 年に 1 回の草刈りですが、ススキなどの丈は低く、たくさんの植物が花を咲かせます。



写真 3 阿蘇の中央火口丘にある B 牧野のかつて牧草の種子と肥料をまいたと思われる放牧地。現在はチカラシバが多く、灰色っぽい穂はすべてそうです。

一つ目は A 牧野の隔年で草刈りをしている草原です (写真 2)。この場所はススキなどの丈が高くなる植物は目立たず、サワヒヨドリやサイヨウシャジン、オミナエシ、シラヤマギクなど様々な植物が花を咲かせる花野の状態でした。2 年に 1 回の草刈りで花野になることは阿蘇では珍しいのですが、尾根に近いので土壌が薄くよく乾いており、長年の草刈りで土壌が貧栄養であるために、ススキなどの丈が大きくなれないのだと思われます。花野はたくさんの植物が花をさかせるので、盆花採りなどにも利用されてきたと考えられ、草原の文化の観点からも生物多様性保全の観点からもとても重要な場所です。

二つ目は B 牧野のかつて土地改変され牧草地になった後に放牧を続けている場所です (写真 3)。ここでは、チカラシバが圧倒的に多く、キンエノコロやイヌタデ、ゲンノショウコなどが混ざる植生でした。この場所は土地改変した後に、ナガハグサやオニウシノケグサなどのヨーロッパなどが原産の牧草を播種したと思われる場所ですが、その後、牧草地の更新が行われなかったようです。ヨーロッパから導入されたイネ科の牧草は阿蘇の環境では生育できず、在来種のチカラシバが増えたと考えられます。阿蘇の野草地で放牧を続けると普通はシバやトダシバ、チガヤが多い丈の低い植生になりますが、ここでは土地改変の際に大量の施肥をしたために典型的な放牧地の植生にならず、チカラシバが多い植生になったようです。今回の調査結果から、土地改変による土壌の移動や施肥が植生に強く影響を与えることがわかります。

以上、牧野カルテの植生調査の結果の一部を紹介しました。阿蘇の草原は非常に広大で、管理方法や

土地利用履歴、地域性など植生や植物の分布を決める要因が複雑に絡み合っています。今後、牧野カルテ調査のデータが蓄積されることで、このような要因のうち草原の保全と再生にとって重要なものが抽出できるのではないかと楽しみにしています。



## 長崎県・五島列島の草原

(横田 潤一郎・弘子：東京都在住)

五島列島は、140 あまりの島々からなりますが、島の草原は、南西に位置する福江島と、北端に位置する小値賀島、宇久島において比較的まとまっているようです。小値賀島は近年、町おこしで有名な島なので寄りたかったのですが、時間の関係上、福江島と宇久島を訪ねるにしました。

訪れるまでは、どちらも同じ島にある草原ですから、ある程度、にかよった草原に出会えればばかり考えていましたが、興味深いことにその景色は全く異なるものでした。実は、福江島と宇久島では、自治体も異なりますし、人口の規模、文化、そして主要な産業も違います。共通点は島ですから、海が見える景色ということでしょうか。今回は、島に残っている壮大で美しい草原の景色をご紹介します。

## ■福江島・鬼岳

福江島は、五島列島のうちでもっとも大きな島です。自治体としては、福江島にあった福江市を核に、南西部のいくつかの島からなる1市4町を合併して五島市となりました。五島市の人口は約4万人、福江島の人口も約3万6千人と、五島列島の中心的な市・島となっています。

その福江島のシンボルとも言える山が鬼岳（おにだけ、おんたけ）で、福江島の南東部に位置する火山群の中で最も大きな火山です（写真2）。阿蘇の米塚、伊豆半島の大室山と同様に、おわん型のスコリア丘となっていますが、火口の北側が開いた馬蹄型（U字型）の火口を持っています（写真3）。

さて、鬼岳では概ね中腹（標高200m前後）から頂上まで全体が草原として維持・管理されています。かつては、鬼岳周辺の主要作物であるたばこの肥料用の採草が主な利用用途であり、福江島は五島牛の生産地として有名ですが、鬼岳の草地が放牧や飼料採取に使われていることはないようです。

また鬼岳は、福江島の重要な観光資源となっています。頂上からは海が望め、単純に景色



写真1 五島の草原を巡ってきました！！

がよいということもあるかと思いますが（写真4）、五島名物のバラモン風の凧あげ大会（写真6）や、マラソン大会も、ここ鬼岳で開催されます。草原の入り口には、芝生の斜面が整備されており、小さなバラモン凧をあげている家族、草ソリで遊ぶ家族もおられました（写真5）。私も昔、草ソリに連れて行ってもらった記憶がありますが、ただ草原を散策するだけではなく、このように遊べる空間が整備されていると、とてもいいですね。



写真2 福江島のシンボル・鬼岳



写真3 火口は北側が開いている馬蹄



写真4 頂上からは福江の町と海が望める

少し植物についても紹介したいと思います。あいにくの強風であまりじっくり観察できませんでしたが、メガルカヤが多いススキ・チガヤ群落が成立していました。海が近く、潮風が強いためでしょうか、特に風が当たる場所では草丈が膝丈程度におさえられています。訪れた時には、オトコエシが目立って点々と白い花を咲かせていました。他には、サイヨウシャジン、ノダケ、カワラマツバ、ツルボといったものが丁度、花盛りでした。

草原の維持管理としては、草資源の採取と景観保全のために数年に一度、火入れが行われているようです。スコリア丘全体が草原であること、中腹にはサイクリングロードが整備されているので、おそらく草原の下部から一斉に火を入れていくのではないかと想像されます(写真9)。同様の火入れの方法は、同じスコリア丘である大室山でも見られますが、防火帯の整備作業が必要ないことに加え、延焼の恐れが少ないため、火入れ作業も比較的安全に行えるように思います。全国の草原では、周辺の人工林化などに伴い、火入れ作業の重労働化が維持管理作業において問題の一つとなっています。火入れを安全で効率的なものにしていくためにも、鬼岳などの事例を参考にして、例えば防火帯を兼ねた作業道・散策道の整備や、そもそも防火帯を必要としない土地区間の再整備など、改善していくことが求められます。

### ■宇久島の草原

宇久島は、福江島とは逆に、五島列島の北東端に位置し、日本海の厳しい北風に最もさらされる場所にあります。宇久島では、JA ながさき西海宇久支店・支店長の里村さん、家畜診療所の中川先生、柴山さんのご紹介で、野方地区の菅さん、木場地区の岩本さん、神之浦地区の田邊さんにお話を伺うことができました。

宇久島には、平家盛が流れ付いたという伝説があり、かつては五島列島の中心地として栄えたようですが、現在では2,500人あまりの方が住まわれています。なお、長崎市とつながりの深い五島市や上五



写真5 一部に草スキー場として芝生斜面が整備されている



写真6 五島名物・バラモン風(燈瀬ビジターセンター)市内の至る所で見かけられます。ゆるキャラのバラモンちゃんにも出会えるか



写真7 訪れた時のメインはオトコエシ



写真8 斜面にもよるがメガルカヤが多い印象



写真9 草原の下部には防火帯に利用できそうな周回路が整備されている。

島町とは異なり、佐世保市との関係が深く、2006年には佐世保市と合併しています。加えて、長崎県では五島列島ではなく、平戸諸島の一部とされているようです。

面積が24.92km<sup>2</sup>、島の道路を一周してもせいぜい30km程度と小さな島ではありますが、宇久島には長崎鼻草原、野方草原、木場(こば)草原、大久保草原、平原(ひらばる)草原、神浦(こうのうら)草原と、いくつかの草原があります。これらの草原は、すべて地区の共有草原となっており、草原の名前はすべて地区名に由来します。草原は、地区で飼育されている牛の放牧地や飼料の採草地として利用されています。実は、宇久島の主要産業は子牛の生



産で島内全域で牛が飼育されており、自然の放牧地で育てる繁殖産業が「島の宝 100 選」に選ばれています。偶数月に 1 回開催されるセリ市では、毎回 300 頭ほどの子牛が出荷され、三重を始め、全国から肥育農家が買い付けにやってくるそうです。草原は主に島の北岸にまとまって分布しています。恐らく、強い北風により草地としての維持が容易であること、他の用途に向かないことなどから、北岸に多いのだ

と思います。

小さな島にまとまって残されているこれらの草原ですが、その利用状況は地区や利用者によって様々です。例えば、電柵で放牧地を囲って数頭を一度に離しているところ（写真 16）もあれば、牧柵がなく牛を 1 頭 1 頭つないで管理しているところもあります（写真 17）。植生としては、ほとんどが中～強度の放牧圧により、シバ草地となっていますが、放牧

強度が弱いところではチガヤが優占する草地となっていたり、バヒアグラス（アメリカズメノヒエ）の播種が行われている牧草地もあります（写真 15）。

これらの草原のなかでも平原草原は特徴的です。地区にゴルフ好きの方がおられるようなのですが、放牧地をそのままに、ゴルフ場として整備されています（写真 13）。それでも、自然の地形を生かされたと思われるフェアウェイにはカラナデシコの花が咲いており、野草、牛、海といろんな景色が備わった、趣のあるゴルフ場となっています。また、神浦草原は利用が停止されていた時期があり、一時、樹林化してしまったようですが、伐木と火入れによって草原の再生が試みられています（写真 14）。

今回、お話をお聞きできた地元の方によれば、牧草はよく伸びるので多くの牛を放すことができるが、自然の芝のほうが牛の好き嫌いがなく、できれば自然の芝がよいと感じられている農家さんが多く、伝統的な放牧様式やその景色が地元の風景として、まだまだ残っているように感じました。

主要産業の中心として、今も利用されている宇久島の草原ではありますが、やはり農家の高齢化など、全国と同様の課題



写真 10 灯台のある野方草原



写真 11 広大な景色の大久保草原



写真 12 港がある木場草原



写真 13 平原草原とゴルフ場



写真 14 神浦草原 かつては奥に見える稜線まで草原だった



写真 15 長崎鼻草原 全面的がバヒアグラスによる人工草地



写真 16 木場牧野の電柵 放牧時期は 5～11 月、牛の脱柵も



写真 17 牛をつなぐ草原もあり、毎朝晩農家の人が牛の世話に通う

を抱えられているようです。地区によっては草原の利用が少なく、アカマツ林化してしまっただころもありましたし、今利用されている草地でもハマヒサカキ（地元ではイノシバと呼ばれる）などの低灌木の侵入も見られます。また近年、隣接する島からイノシシが海を渡り、宇久島で爆発的に増えていることも問題となっています。ここ数年、牛につくマダニが増えているようですが、イノシシによる影響は、間違いなくあるのではないかと思います。

など様々ですが、離島ならではの草原の景色は、これからも残せるようお手伝いできればと思います。

最後になりましたが、宇久島の皆様には、突然お邪魔したにも関わらず、車で各草原を案内していただいたり、親切に宇久の畜産や草原についてお話しいただき、いろんな情報を得ることができました。特に、中川先生には車までお貸しいただき、充実した時間を過ごすことができました。簡単ではございますが、ここに御礼申し上げます。

### ■終わりに

長崎県は島が非常に多く、五島に限らず対馬島、平戸島、壱岐島などの離島に多くの草原が数多く残されています。まだまだ現役の生産現場として利用されている草原、風習や観光目的として維持されている草原



写真 18 梅ノ木地区の牧野  
アカマツの侵入が見られる



写真 19 宇久島でもイノシシ  
が問題となっている

## ■「全国草原リレー」(第5回)

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで、各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第5回は、理事でもある徳永氏に、蒜山地域での取り組み

を紹介して頂きます。今回の執筆者が、次回の執筆者へと原稿をリレーしていきます。

### ■草原の環境を生かした蒜山地域での生物多様性ツーリズム■

(徳永 巧：岡山県在住)

#### 蒜山地域にみる草原牧野の環境

蒜山地方では、ススキ草原が鳩ヶ原(内海谷・天谷地区)、郷原地区、熊谷地区、湯船地区など旧川上村の山麓域に広くみられるが、これらは、春の山焼きによって維持されている半自然草原(あるいは二次草原)である。

蒜山地方に残る草原の多くは、茅(ススキ)の多く生えるススキ草原で、かつての草刈り場や放牧場である。このようなススキ草原は、かつて全国の山村に広く見られ、草刈り山(茅場)として利用管理されていたが、産業構造の変化や化学肥料の普及、人工草地の拡大、畜産飼料の輸入などから激減し、現在では、まとまった面積の草原は、阿蘇や霧ヶ峰などの一部の地域にしか見られなくなったが、蒜山地方には、現在も二百ヘクタール以上の草原が残されている。蒜山地方の草原は、傾斜のある山裾斜面や台地斜面に分布しており、



平野部や平坦な台地面は、水田や高原野菜畑、人工草地(採草放牧地)として利用されている。

また、蒜山地方では、斜面上の草原に樹木がまばらに育つ印象的な景観や植生を目にすることがあるが、これは、火や乾燥に強いカシワやマツなどの樹木が火入れに耐えて生き残っているものであり、蒜山地域は寒冷な気候であるためカシワがよく育っている。



### 蒜山地域にみる草原牧野の生き物

ススキ草原は、ブナ林と並んで（あるいはブナ林以上に）、蒜山地域の自然を象徴する植生である。温暖で降水量の多い日本では、草原は人の手が加わらなくなると、植生遷移が進み、森林の環境へと移行する。近年まで草原であった場所も、火入れ（山焼き）などの管理が放棄されて雑木林へと遷移したもののほか、スギ・ヒノキが植林されて人工林になっている所も多く、かつて全国の山村においてみられた広々とした草原の環境は激減し、美しい草原風景の消失とともに、草原に生息する野生生物の生息環境も消滅しつつあることから、キキョウ、オミナエシなど、近年まで全国の農村で普通にみられた秋の七草もみられなくなり、地域での絶滅も懸念されている。

そのような中、蒜山地域には放牧や火入れによって維持されている草原が広く分布しており、キキョウやオミナエシ、ユウスゲなど草原に咲く野草も多く見られるほか、蒜山地域および隣接する新庄村においては、サクラソウをはじめ、フサヒゲルリカミキリやウスイロヒョウモンモドキなど稀少野生生物の保護活動も積極的に行われている。



フサヒゲルリカミキリ

### 蒜山地域にみる草原牧野と生活文化

近年まで全国の農山村には、「草刈り山」、「茅場」と呼ばれる半自然草原（里山草原）が広く分布し、肥料や飼料、屋根材などとして農家に活用されていた。いわば、草刈り草原は、かつての里山において代表的な環境要素の一つであり、人と自然が共生する文化的な景観である。

蒜山地方では、旧川上村にススキ草原が山麓域に広くみられるが、草原の多くは、公有地（真庭市の市有地）であるが、集落の入会地であり、春の山焼き、牛の放牧、草刈りによって維持されており、ごく近年まで、そこで生産されるススキなどの草（茅）は、農地の肥料、家畜の餌、茅葺き民家の屋根材として、広く利用されていた。

そして、これら草原は、春の山焼き行事として、



現在も集落の共同作業によって維持されている。

### 蒜山地域にみる草原牧野の風景

蒜山地域の草原の大きな魅力として、明るく開けた高原の自然景観があげられ、春から秋にかけて多くの花が咲き、蝶が舞う明るい林野の風景がみられる。

とりわけ、草原や牧野からの眺望が良好で、大山や蒜山三座を美しく望むことができ、大山から烏ヶ山、皆ヶ山、蒜山三座と連なる火山群を背景として広がる高原牧野の風景は雄大かつ牧歌的で、その景色を楽しみに多くの人が蒜山地域を訪れている。火入れが行われる草原では、四季それぞれの風景を見ることができ、早春に行われる火入れの燃えさかる炎、山焼きの後の黒く焼けこげた丘の風景、春から初夏にかけて少しづつ濃くなっていく草原の緑、そこにはワラビやゼンマイ、ギボウシなどの山菜の芽吹きが見られる。

梅雨から夏にかけて草原では、オカトラノオやススキ、ハギの仲間が急激に成長し、背の高い草薹となる。かつて、このころ草原に生える夏草が地区の人たちによって刈り取られ、家畜の餌とされてきたが、社会経済構造の変化にともない、草原での草刈りはされなくなっている。夏から秋にかけて、草原ではススキ、オミナエシ、キキョウ、ハギなど秋の七草と呼ばれる野草が花を咲かせ、明るい秋の風景へと変わっていった。

晩秋から初冬にかけて、草原は一面がススキの枯れ野原となり、蒜山地方では、このころ茅葺き民家の屋根材となる茅（ススキ）が刈り取られていた。

### 草原の環境を生かした生物多様性ツーリズム

四季折々の風景をみせ、大山や烏ヶ山、皆ヶ山、

蒜山三座などの名峰を望む絶好のビューポイントであり、景観的にも高い評価を得ている蒜山地域の草原であるが、その資源活用となると進んでおらず、これが人の手による草原の保全を考える上で大きな課題となっている。

そこで、進めているのが、草原のエコツアー

ム利用であり、大山道と呼ばれる古道を復元させた草原を歩くトレッキングルートの開発とあわせて、キキョウやオミナエシなど草原に生息生育する野生生物を調査したり、保護する体験活動を取り入れたツアープログラムを開発し、これを生物多様性ツーリズムとして事業化しようという活動である。

平成 25 年は、この地で進めている事業「オオサンショウウオの王国を守ろう！生物多様性ツーリズム大山蒜山」が観光庁の「官民協働した魅力ある観光地の再建・強化事業」に事業採択され、この秋は大手旅行代理店との連携で、蒜山地域の草原牧野をフィールドとしたエコツアー・プログラムの商品化に取り組んでいる。エコツアー・プログラムの開発にあたっては、広島大学の中越信和先生や関西トンボ談話会の谷幸三会長など学識経験者の指導協力を受けている。



生物多様性ツーリズムのツアーパンフレット

## ■草原をめぐる動き（2013年10月～12月）

- 10/26-27 茅刈り講習・検定・秋の上ノ原散策（場所：群馬県利根郡みなかみ町上の原、連絡先：森林塾青水）
- 11/16-17 会津大内宿で茅刈りと茅葺き体験研修（場所：福島県南会津郡下郷町大内宿、連絡先：日本茅葺き文化協会）
- 11/16-17 初冬の枯れ野にたたずむ茅ボッチの運びだし（場所：群馬県利根郡みなかみ町上の原、連絡先：森林塾青水）
- 11/23 乙女高原草刈りボランティア（場所：乙女高

- 原（山梨県山梨市牧丘町）、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 11/23 千町原の秋の保全活動（場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：芸北高原の自然館）
- 11/24 シンポジウム『奇跡の原っぱ「そうふけっばら」を次世代へ』（場所：東京大学弥生講堂一条ホール、連絡先：日本自然保護協会）
- ※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

### 全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol.16 2013年10月号

全国草原再生ネットワーク事務局  
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1  
NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】事務局のある島根県大田市では、三瓶山のススキ草原が見頃を迎えました。先日、国立公園指定 50 周年の記念式典が行われました。三瓶山が国立公園に指定された要件のひとつが草原景観ですが、この 50 年の間にその範囲はずいぶん狭くなりました。これまでの 50 年を振り返るとともに、これからの三瓶山や草原景観について、見つめ直す機会になればと思います。